

すれ違う車も夜になると殆ど無くなり、中古の車がエンコすると嫌だなあ・・・と心配しながら走ったものである。たまに、ヘッドライトの先に道路を横切る狸の姿が見えることもあった。

熊本と鹿児島県の山中の県境の峠を越すと、国道は今度は長い下り道となり、やがて大口市内（現伊佐市）に入っていく。平坦な菱刈、栗野の町を通り抜けると、宮崎方面から伸びて来ている自動車道につかり、栗野インターチェンジで再び九州自動車道に入る。鹿児島空港の脇を通り、加治木町（現姶良市）へ出ると、あとは錦江湾が広がり、昼間であれば桜島の姿も見える筈である。途中内陸部へ入り、薩摩吉田口で高速道路を降りる。一般道路へ出て更に南下すると、鹿児島市街地へ降りる大きなループ状の道路を通ることになるが、ここからのひと際明るい夜景がとて美しい。いつも、「鹿児島に属するて来た！」という気持ちにさせられる。あとは市街地を通り抜け、やっと下荒田の社宅に到着する。熊本から休みなく走り続けること約五時間半、走行距離は約二百二十キロとなる。

家族と束の間時間を通り、日曜日の夕方、再び同じコースで鹿児島を立ち、夜の十一時過ぎに熊本の実家に戻る。

次女が昭和六十一年十一月に鹿児島大学附属病院で生まれた後も、鹿児島と熊本を往復する生活が続いた。そしてやがて、熊本市内の大江にあったN.T.Mの社宅に入居することとなり、昭和六十一年三月に鹿児島市の社宅を引き払い、今度は家族四人であの往復ルートで最後に車で走って熊本に移転したのである。

私は、鹿児島と熊本を往復した半年間で、約一万二千キロを走ったことになる。次女を出産した後、妻は誰も知らない鹿児島で小学生の長女の世話をしなが、次女の育児にも追われて、一時、家政婦さんを雇って日常を過ごさざるを得なかった。あの頃はとて大変な思いをしたと、今でも妻は言う。私も、当時三十代の前半だったからこそ、長時間の過酷な往復が出来たのだらうと、時折思うことがある。

熊高野球部最後の夏の思い出！

先日、野球部の練習風景を親に母校のグラウンドを訪ねました。当時は夕暮れになると野球場のセンターライト方面



（校舎と反対の西側）にかけて空が茜色に染まり、特に秋が美しく、つた記憶があるけれど、今はビルと成長した樹が邪魔していました。因みに「秋は夕暮れ」と古人は言います。彼女の鋭く、豊かな感性には共感するものの、私は白秋から幻冬を迎える歳になり、「秋」と「夕暮れ」が重なる「いとをかし」といふより「ひたぶるにうら悲し」の方になる

かなと。

学び舎の敷地に入り雰囲気は変わったのかチョイと詩人になりましたが、私の柄（どうも体育会系と思われているらしい）じゃない。つてか（笑）体育祭では女子とフオークダンスを踊ったり（♪きんぎんぎらぎら夕日が沈む）、仮装行列もしたグラウンド。サッカー、ラグビー、ホッケー、陸上各部（懐かしい面と名前が浮かびます）が共用していたグラウンド。今もそうだろうけどよくあの広さで同居出来ていたなと感心します。夫が工夫していたんだし。その点、我が野球部は専用グラウンド、当時のメンバー十三名、クラブ活動一人当たりのグラウンド占有率は高かったでしょう。その上に全校応援までしてもらって恵まれていました。

同級生四人プラス1の球友。

大森男、2ストライク3ボール、バッターボックスからベンチを見ると監督のサインは待て？（バットは振るな）という都市伝説が（笑）

渡辺博、デッドボールまがいの球を避けた後、ヒットを打ち一塁ベース上で「おいピッチャー、ショウナン塾（漢字が分からん、中学浪人の塾）ばむんよ」と吠えた。

山田耕路、投打二刀流！皆んながエラーするのが当たり前の中、黙々と一人で投げ抜いていた（内心は怒ってた？）。タフな凄腕の奴、なんと恐ろしい事にチームにピッチャーは山田一人しかいなかった。彼の活躍する姿が中学生の時テレビで見て、熊高で野球がしたいと思いついたという後輩がいた。私、長嶋茂雄のユニフォームの着こなしを真似していたが体型他すべてが全く不似合い。リアルで選手長嶋を知る年代もだんだん少なくなってきた。

そしてそしてマネージャー（まだ女子マネとか言っていた世間ではやられる前の時代）の徳永太恵子嬢、三年間で唯一私と口を利いてくれた女子。スポーツ店に、予算が足りないからと言ってまだ高校生なのに値切り交渉までしてくれていた。レモンスライスを売ると藤崎台球場のベンチを思い出します。幸いにも良い時代に多くの友に出会い、恵まれた豊かな高校生活でした。あの頃を忘れず心の中には青春の血潮を持ち続け元気で若々しく在りたいと思います。

さて明日は早起きしてポンコツ車で阿蘇路を走り「秋はあけぼの」を観てみようか。

（四室 松窪英人）

サラリーマン生活を終えて！

昨年六月、熊四十三とENTOの七年、計五十一年のサラリーマン生活を終えて一年経過。九五歳の「やおいかん」母と、更に手強いのに四十七年間虎の尾を踏み続けてきた嫁さんとの間で、四苦八苦し続けております。

とは言え、「古来稀なり」の七十を過ぎて、生きていくだけで丸儲け。多くの同窓の方々に恵まれて、感謝しかありません。振り返れば恥ずかしい事ばかり。思い込みが強く認知も心配で、頭力キカキ生きてます。

自分の過去を振り返りながら肥後狂句を詠むと、至らない己を反省すると共に、伸び代だけは残っているなど確信している所です。今後ともどうぞよろしく願います。

（二室 杉山 泰司）

Live Music & Restaurant Bar CIBS

代表者を退任

令和七年十月三十一日を以って、二十年の長きに渡り四五会の皆様にも愛顧頂いておりましたLive Music & Restaurant Bar CIBSの代表者を退任致しました。特に四五会の皆様には、コロナ禍に於いては、多大なるご支援を頂き、心から感謝申し上げます。

七〇歳を期に、若手への承継を画策しておりました。が、コロナ禍による経営の逼迫、悪化もあり、二転三転しております。後期高齢者となる七十五歳を前に、何とか若手事業家に承継出来る運びとなり、一安心といったところですが、承継後も運営が従来にも増して軌道に乗る迄は支援して行くつもりです。然し乍ら「老害」にはならぬ様、留意したいと思っております。

この度、木村会長から「内野君の人生設計なりを寄稿してくれ」との依頼を受けました。振り返れば、行き当たりばつたに「設計」などある訳もなく、恥ずかしい限りです。



中高時代はピートルズとダールブサウンズにシビレ、エレキギターに熱中。大学時代は麻雀に狂い、連日の徹夜麻雀で朝方、麻雀屋を出ると、朝陽が眩しくて、通勤・通学する人々の姿を横目で見ながら「一体、俺は何をしてるんだらう、これから俺はどうなるんだらう？」



と自問する暗黒の日々でした。大学も麻雀に狂って二年留年の挙句、卒業を前にして、話せば長くなる。ある事情により無期停学となる始末。最後に出会った教授から「お前は熊本に帰って、アルバイトでもしながら、来年の試験の時だけ大学に来て、俺の本の感想文でも書いておけ」と言われ、そんな訳で僕の社会人としての出発は熊日新聞の夕刊の求人広告で見つけた帯山の自宅

近くにあった設備資材の販売会社だった。然し乍ら、この僕が世間の人様と同じ時間にかけて、仕事に行くのが嬉しくて、今思えば、かなり頑張った？仕事したかも？です。



トラクに水道管やガス管を積んで、工事現場まで運び、荷下ろししていると、発注主の水道工事店の若い社長が、ピカピカのクラウンに乗ってやって来た。社長と話していると、中卒で水道屋に弟子入りして、三〇歳で独立したとの事。一体この俺は何をしてるんだらう？と、衝撃を受けたもんだ。「お前は何処の学校を出たんだ？」って社長に言われて、何も言えなかった記憶がある。それから真面目に働いてきた事も有り、いろんな人との出会いで、スカウトされたり、独立する気持ちも全く無かったのに「お前は、もう、自分でやれ！」と、独立を勧められ、三十一歳でビルや工場等の設備メンテナンスの会社立ち上げ、時代の波にも乗り、落ち着いた暮らしをしておりまして、四十五歳の時に下通りのアーケード街を歩いたら、四五会のトロンボーン奏者栗崎君とバッタリあった。彼との出会いから忘れていた大好きな音楽に再度巡り合い、気が付いたら、いつの間にか？ライブハウスのオヤジになっていた次第であります。

人生設計には程遠い僕の人生であります。人との出会いに恵まれて来た事だけは確かだし、有り難い限りです。エレキギターも麻雀も仕事も、人の上に頭張らなければ、人の上に出来ない事も判りました。学生時代に人以上に勉強する事を判っていたら、（笑）今年の一月からスイミングに没頭しております。マックスで体重九十七キロ、ウエスト九十一センチでしたが、現在は体重六十四キロ、ウエスト七十六センチと、学生時代のサイズになりました。せめて寿命だけは平均点を取りたい！と、思っております。くだらない投稿、お許し下さい。

（三室内野 昌時）